新市町村の横顔

下館市

1. 沿　革　本市は水戸から汽車で1時間半、左に加波、紫尾の山麓と関東の名峯筑波を見上げながら、右には広々とした田畑の果てに遠く白雪をいただく日光、那須の連山を眺める台地を中心に開けたところである。市街地の東部を勤行、小貝の両河川が流れ、西側を鬼怒川が貫流しており、大変豊沃な土地に恵れている。ここは水戸線や真岡線と常磐線取手駅に通ずる常総鉄道が接続するところで県西における商業、経済、交通上の一大中心地である。

この地方一帯は上古時代(成務天皇御代)に新治国といわれて国造の所管に属していたが、その後孝徳天皇の大化年間に評へ移管され、さらに新治国から分れて白壁評となつたが、次に桓武天皇の延暦4年に勅命によつて白壁を真壁と改められた。昔からこの附近には大豪族が居住していたが、平将門の乱を平定した藤原秀郷が来て、当地へ上館、中館、下館という追討軍の根拠地を築いたことが、下館という名の起源で約1,000年前の歴史を持つているのである。藤原氏の後裔実宗が常陸介となつて、当地を所領し、伊佐庄中村に代々居住して、現在の下館の基礎が生れ、その後水谷、石川氏などの旧城主の支配下にあつたが、その跡には国宝中館観音と伊佐城址があつて、今は桜の名所となつている。

本市は昭和29年2月1日に下館町に近接する竹島、養蚕の両村が編入し、さらに3月15日には五所、中、河間、大田、嘉田生崎の5カ村を編入して新市の誕生となり、今や面積85.90平方粁、世帯数9,613、人口52,849人(男25,605、女27,244)を擁する商業兼田園都市をして、新市ながらも4位にのぼつた。

2. 産　業　まず農業面を見ると農家戸数4,453、農家人口29,051名(男14,229、女14,822)、耕地面積は水田3,427町、畑1,649町、果樹園39町、桑園127町、山林原野440町を有し、特に水田と桑園の多いことが目つている(昭和30年夏期基本調査)。この附近には養蚕家が多く戸数421戸、年間生産繭量約25,545〆にのぼり、隣市の特産結城紬の原料供給地となつている。また畜産面は牛1,398頭、馬1,453頭、豚863頭、にわとり32,262羽、山羊547頭、めん羊89、兎518頭、あひる199羽を有し、特に農家の副業としての養鶏が盛んで、婦人会の卵子貯金まで行われている。またこの附近ではかんぴようや煙草、梨などの特用作物の栽培も盛んで、特産物の一つとなつています。

(中館観音本堂)

次に商業面を見ると、法人の商店及び個人商店で常用労働者を有する事業所226、従業者数1,416、年間の販売金額は約35億4,000万の多額にのぼり、水戸、土浦市に次いで県下第3位を占めている。さらに常用労働者を有しない個人商店は845、従業者数1,453名、8月中の販売金額約5,600万円に達し、商業市下館の面目躍如たるものがある。(昭和29年9月1日商業調査)

次に工業面を見ると、事業数92、従業者2,456数名、年間の製造出荷額約22億1,400万円にのぼり、中でも食料品工業26、紡織工業21とその大半を占めているが、菓子類や足袋底の製造が盛んである。特に下館織底の製造が非常に盛んで、その品質も優秀で全国的に大変好評を博し、埼玉県行田足袋のおもなる原料となつており、年間の生産は約3億円に達している由。そもそもこの織底工業は明治8年に養田安忠氏が当地方の産業振興策の一つとして始めたのがその元祖で、年を追つて農家の副業にまで普及し、近年動力機械の導入によつて、ますます生産は増加され今日の隆盛を見るに至つたのである。この外にも電気機具の製造工場があつてはんそう機の生産が多い。

3. 教育文化

ここには高等学校が二つあつて生徒数2,477名、(男1,149、女1,338)、教員数83名外に中学校8、生徒数3,743名(男1,936、女1,807)、小学校13、生徒数7,591、(男3,857、女3,734)、教員数182名となつている。ここにはさらに幼稚園3、各種学校10がある。また当市では巡回図書館や公民館の運動とともに新生活運動の推進に熱心で、冠婚葬祭の簡素化、台所の改善、集会時間の厳守、服装の改善などの徹底を計つているが、特に婦人会運動が盛んである。

なお下館市が生んだ芸術家として昔は画家祥啓、現在は板谷波山翁がいる。祥啓は土御門天皇の御代の人で号を雪溪といい、雪舟などと肩を並べた一代の画伯で特に仏画や山水画を得意としたそうである。波山翁は明治5年に田町にて生れ、東京美術学校を出て陶窯の製作研究に専念し、その作品は神えん漲り、清香漂い、れいろう当代これに比べるものがない。昭和29年には文化勲章を授与され、今なお85才の老令にもかかわらず、名器の製作に専念し、神技ますます輝き、卓越せる作品を数多く残している。翁は先に名与県民、名与市民に推戴され、この足跡は遠く本市の歴史上に光彩を放つものと思われる。

昭和30年度歳入歳出追加更正予算額　(単位円)

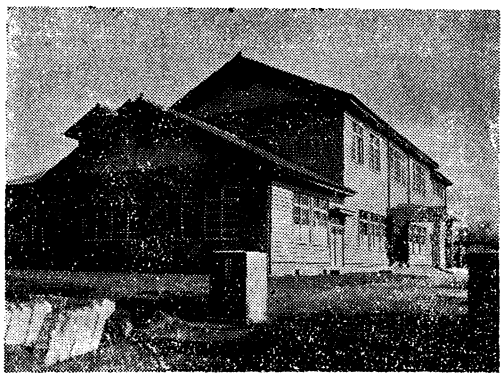
(歳入)

市税	地方交付税	企業及び財産収入	使用量及び手数量	国庫支出金	県支出金	寄附金	繰入金	繰越金	雑収入	市債	合計
98,264,850	35,000,000	1,162,272	3,092,301	26,764,006	3,585,795	1,074,503	558,001	8,859,865	2,434,407	20,600,000	201,396,000

(歳出)

議会費	市役所費	消防費	土木費	教育費	社会及び労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合計
3,496,974	51,559,870	9,175,550	24,270,210	53,573,693	22,193,875	5,757,843	16,280,565	1,256,337	1,001,306	786,417	2,605,644	7,357,716	2,080,000	201,396,000

牛久町



（新装成つた町役場）

1. **沿　革**　ここは稲敷郡の南部に位し、常磐線の沿線にある牛久沼の東岸一帯を占め、昭和29年2月1日には単独で町制をしき、29年4月1日には岡田村を合体し、30年2月1日にはさらに奥野村を編入して、今や面積59.59平方粁、世帯数2,915、人口数15,623人（男7,801、女7,822）を擁する町として再発足した町である。この地方は、昔牛久藩の領地で天正18年（365年前）に由良国繁が藩主となり、さらに元和元年に山口重政が藩主となつて明治維新を迎えたのである。明治5年廃藩置県の制によつて牛久県が置かれ、明治12年には郡区編成に際して一行政区であつたが、明治17年に岡田村の一部を合せて一行政区となり、次いで明治22年の町村制実施によつて、岡田村の一部と分れ牛久村になつたものである。ここは昔の陸前浜街道の旧宿場となつていたために、人家開密、交通便にして自然と小市街地をなすに至つた。なお附近は土地豊饒また施政よろしきを得て、今や近代的農村建設計画を着実に進めており、県内は勿論遠く関東近県からの視察客が多いそうである。

2. **産　業**　まず農業面を見ると、農家戸数1,997、農家人口11,753名（男5,785、女5,968）で、耕地面積2,197町（田723町、畑1,370町）、果樹園44町、茶園10町を有する理想的農村としての立地条件を備えている。中でも1.5町以上の経営農家が520戸にのぼり、農家全体に電力の利用度が著しく進み、電動機433台、石油発動機375台、トラツクター6台、畜力カルチベーター92台、畜力砕土機65台、動力耕うん機9台、動力用脱穀機751台、動力用籾すり機312台、動力用精米（麦）機284台、動力用製細機156台を保有し（昭和30年8月1日夏期農業基本調査）、農業の機械化は年を追つて進んでいる。

また畜産面は、乳牛97頭、役牛952頭、馬58頭、めん羊112頭、山羊233頭、豚849頭、兎420頭、にわとり13,862羽の多数にのぼり、農業経営の機械化とともに有畜化の普及が進み、近代的農村の建設のために全町をあげて邁進している。なおここには某酒造会社の古い葡萄園があつて、当地方の名物になつているそうである。

次に商業面を見ると、牛久駅を中心に昔から商店街が発達しており、法人及び常用労働者を有する個人事業所18従業者数99名、年間販売金額約1億8,000万円、常用労働者を有しない個人商店163、従業者数323名、8月中の販売金額900万円にのぼつている。次に工業面を見ると、事業所数27、従業者数393名、年間の製造出荷額約1億8,400万円であるが、中でもブドー酒と電動機の製造がおもな地位を占めている。

3. **教育文化**　ここには小学校が7あつて生徒数2,062名（男1,054、女1,008）、また中学校3、生徒数940名（男483、女457）であるが、各学校とも設備の改善に努め教育事業の実績も郡内で模範とされている。また公民館や青年学級などの活動も非常に活発であり、新生活運動の推進についても青年、婦人団体の協力によつて立派な成績を収めている。特に県下唯一の有線放送施設を全町内に普及するように計画を進めているが、去る30年11月18日に着工してとりあえず2月25日にその一部の開通式を挙行する運びとなつた。これによつて町内の連絡会報などに相当の利便をもたらすものと思われる。なお3月末には設置数を300まで増強するそうである。この町の最も大きな特徴は赤字財政の歴史を持たないことだそうです。特に納税組合が発達しており、町としては常に手持金500万円程度を持つており、県下最高の裕福な町といわれ、町財政運営の妙は他町村の羨望をかつている由。また31年度からは町営のじん芥、糞尿処理事業を計画しているそうである。なおここからは俳句とさし絵の巨匠小川芋銭が出ている。

4. **財　政**　　昭和30年度歳入歳出予算　　（単位円）

（歳　出）

議会費	役場費	警察消防費	土木費	教育費	社会労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	計
559,100	12,229,250	1,766,200	3,105,050	8,576,010	7,095,630	1,628,800	4,872,630	3,877,700	437,500	195,250	284,800	1,069,640	200,000	45,897,560

（歳　入）

町税	地方交付金	公営企業及び財産収入	夫役及び現品収入	使用料及び手数料	国庫支出金	県支出金	寄附金	繰入金	繰越金	雑収入	町債	計
23,087,934	9,068,830	50,200	6	691,385	3,356,400	1,096,209	3,002	2	2,353,250	110,342	6,080,000	45,897,560